

スポーツと社会貢献 僕たちのやり方 一歩踏み出す勇氣

■対談 赤星憲広

元プロ野球 阪神タイガース外野手／野球解説者
特定非営利活動法人 RESTART Baseball Clubオーナー

× 岩田稔 元プロ野球 阪神タイガース投手

■リーダーズ・ナウー7

〈東京2020オリンピック・パラリンピック特集〉

- 男子1500m(視覚障害T11)銀メダリスト
男子5000m(視覚障害T11)銅メダリスト
和田 伸也 さん
- 空手女子形 銀メダリスト
清水 希容 さん
- バスケットボール女子日本代表
スポーツパフォーマンスコーチ
松野 慶之 さん
- 5人制ブラインドサッカー日本代表チーム
ボイストレーナー
新生 剛士 さん
- セーリング 49erFX級
高野 芹奈 さん





N. Akahoshi



M. Iwata

スポーツと社会貢献 僕たちのやり方

一歩踏み出す勇氣

● 思いを行動に変えて、積み重ねていく

赤星 憲広

● 元 プロ野球 阪神タイガース外野手／野球解説者
特定非営利活動法人 REDSTAR Baseball Club オーナー

岩田 稔

● 元 プロ野球 阪神タイガース投手

関西大学野球部から阪神タイガースに入団し、左の本格派として活躍した岩田稔投手が、2021年10月、現役選手生活にピリオドを打った。岩田さんといえば、1型糖尿病を抱えながら活躍する一方、1型糖尿病患者のためにさまざまな支援活動を行ってきたことも知られる。岩田さんの引退を記念し、タイガースの先輩であり、車椅子寄贈などの活動を長年継続してきた赤星憲広さんのお二人を千里山キャンパスにお招きし、現役時代のこと、それぞれが取り組む社会貢献活動について語り合っていた。

■対談

◆岩田投手の現役引退に思う

——お二人がタイガースで一緒にプレーされたのは何年ぐらいですか。

岩田 2006年から2009年までの4シーズンです。2003年・2005年にタイガースがリーグ優勝したときは、僕はまだ関大生で、赤星さんの活躍もテレビで見っていました。

赤星 岩田くんは入ってきたときから、確固たる自分をきっちり持っている選手だったという印象ですね。周りからは、少しとっつきにくいタイプに見られていたところがあったかもしれませんが、僕に対しては、登板の後に「センターから見て、どうでしたか？」とよく聞きに来たりして、勝手にかわいい後輩だなと思っていました。

岩田 赤星さんは当時選手会長だったので、野球以外のことでもいろいろと相談に乗ってくれて話しやすかったんです。

——そんな後輩が引退したことをどう感じられましたか。

赤星 実は引退を決めたときに直接連絡をくれて。僕のような長く離れたOBにも連絡をくれたことがうれしいなと思いつつも、やはり一緒に戦った仲間が辞めていくことに寂しい思いはありました。そのとき岩田くんが話していたのは「体、肩、肘は元気。気持ちの問題」だと。引退セレモニーは最初から最後まで見たよ。同じ1型糖尿病のJリーガーも駆け付けてくれていたね。

岩田 ヴィッセル神戸のセルジ・サンペール選手ですね。彼が来てくれたのは本当にサプライズで、うれしかったです。ファンからの手紙やSNSでは、病気に負けずマウンドに立っている姿を見せてくれるだけで勇気づけられたという言葉をとくさんいただいて、これまで立ち向かってやってきたことが間違っていなかったと実感することができました。

赤星 現役時代、岩田くんが球場でインスリン注射を自分で打っている姿を初めて見たときは、「岩田、すっげえ大変だな」と思いました。でも、それを大変なこと、特別なことではなく、普通のことだと思わせてくれたのは、岩田くんの日常の行動や病気を感ぜさせないプレーだった。岩田くんの苦労や大変さ、1型糖尿病で苦しんでいる方々の気持ちを、僕たちが本当に理解できるかと



Tops Interview



▲ 本学OBで元プロ野球選手の体育会野球部アドバイザー・山口高志さん(中央)。岩田さんが阪神タイガース入団時の担当スカウトで投手コーチも務めた。



本学野球部時代の岩田さん ▶

いったら、理解できるなんて簡単に言うのは正直うそだと思う。同じ境遇でなければ分かってあげられない部分がある。だからこそ、岩田くんは患者さんたちに一番寄り添える存在だと思いますよ。

◆あの笑顔が力に。プレーと社会貢献の相互作用

——岩田さんは1型糖尿病と闘いながら、プロ野球選手として活躍されると同時に、1型糖尿病への認知・理解を深めてもらう取り組みや糖尿病研究への支援を続けてこられました。赤星さんは社会貢献活動の分野でも岩田さんの先輩で、車椅子を施設・病院等に寄贈する活動を現役時代から続けられています。これまで何台ぐらい寄贈されてきたのですか。

赤星 現役の際は、盗塁と同じ数を施設や病院に寄贈すると決めて301台。引退後はそれ以上になるので、800台近くになりますね。各都道府県すべてに僕の車椅子があります。

——今では多くのプロスポーツ選手が社会貢献活動をしています。が、赤星さんが始めたころはどうでしたか。

赤星 多くはなかったと思います。でも、メジャーリーガーの選手が当然のようにやっているのを知っていたので、日本のプロ野球界でもこういった活動が広がるきっかけを作りたいという思いは持っていました。2003年から始めて、やがて他球団の選手からも「赤星さんみたいなことがしたい」と連絡をくれるようになりました。

岩田くんの場合は、寄付やボランティア活動以前に、本人が1型糖尿病だということで、マウンドで力投するその姿だけで、闘病中の患者はもちろん、多くの人たちが前向きな気持ちになったと思う。そういう意味で、「岩田よ、タイガースファンのためだけじゃない、とにかく皆のために頑張れよ」という特別な思いで彼のプレーを見ていましたね。

岩田 そのように思っていただけなのであれば、すごく光栄です。赤星さんの活動は入団前から知っていて、1型糖尿病患者への支援活動をしたいと具体的に考えるきっかけになりました。先輩が道を切り開いてくださったので、僕は始めやすかったですね。赤星さんには本当に感謝しています。

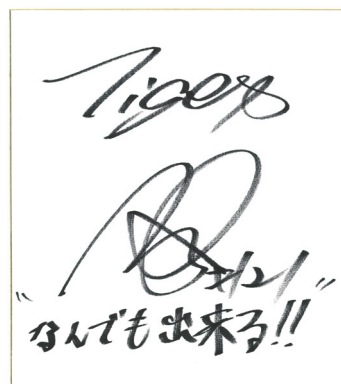
赤星さんが盗塁1個で1台寄贈されていたのに倣って、投手の僕が同じようにできることは何だろうと考えて、1勝につき10万円、1型糖尿病根治を目指す研究に寄付しようと決めました。毎シーズン2桁勝って100万円を寄付する予定でしたが、10勝という壁はなかなか厚かった。でも、自分で積み上げたものを一つ一つ寄付していくことで、野球に対するモチベーションアップにもつながりました。

■対談



岩田 稔—いわた ひろし

■経済学部2006年卒業。元プロ野球選手(投手)。1983年大阪府生まれ。大阪桐蔭高校、関西大学を経て、2005年大学生・社会人ドラフト希望枠で阪神タイガース入団。2008年より1軍先発投手として活躍。2009年WBC日本代表。2021年現役引退。通算200試合登板60勝82敗。高校時代に1型糖尿病を発症。2009年より公式戦1勝につき10万円をNPO法人日本IDDMネットワークへ寄付。2017年同ネットワークと共同で岩田稔基金を設立。著書に『やらの、しゃーない!! 1型糖尿病と不屈の左腕』(角川書店)。



1型糖尿病患者・家族会「大阪くるみの会」でのクリスマス会



阪神タイガース時代の岩田さん



ハイタッチする岩田さんと赤星さん



阪神タイガース時代の赤星さん

(写真はすべて阪神タイガース提供)

赤星 僕は盗塁の数が増えれば増えるほど寄贈できるわけだから、とにかく走ろうと思っていました。2003年から2005年の3年間で60個以上盗塁できたけど、盗塁は結構しんどいんですよ。長いシーズンの中では、打率や守備にも影響が出てくる。選手としてのトータルパフォーマンスを考えると判断が難しいところがあるけれど、オフシーズンに車椅子を届けに行ったときの人々の喜んでいる姿を見たら、また来季も頑張ろうと思ってしまいました。盗塁は自分の力だけで何とかなるけど、岩田くんは大変だったよね。投手がいくら1点で抑えても、打者が打ってくれないと勝ち星は付かない。ジャイアンツに大逆転された2008年シーズンなんて岩田くんは10勝10敗だったけど、僕ら野手が打っていれば、15勝5敗ぐらいになったかも。

だから、岩田くんが2桁勝利という高い目標を掲げて挑戦したのはすごいこと。だけど寄付については、もう少し違うルールにしておけば良かったと思ったんじゃないかな。

岩田 大変なことを始めてしまったと、後になればなるほど思いました。でも、僕も病棟を訪問した時の患者さんのめちゃくちゃ良い笑顔が浮かぶんです。オフシーズンに病院訪問をするために

は、やはりシーズン中に成績を残さないといけない。だから、今頑張ろうと思ってやっていました。

◆関西大学の学生との触れ合い、学び合い

——岩田さんは本学の政策創造学部の学生が企画した1型糖尿病の子どものためのイベントにも参加されていますね。

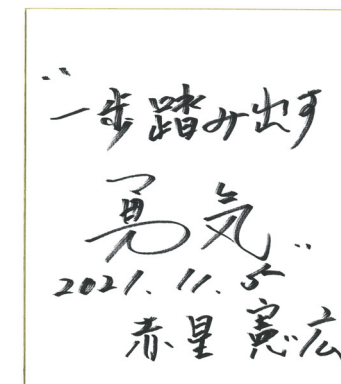
岩田 学生たちが企画した1型糖尿病患者の子どもたちとご家族でのクリスマスパーティが大阪医科大学付属病院(当時)で開催されて、ゲストとして呼んでいただきました。こういう取り組みにはぜひ協力したいので、できるだけ都合をつけて行くようにしています。

赤星 僕は関西大学では、2017年から19年まで人間健康学部の客員教授として、初めて学生対象に講演をしたことがあります。あの時は、柄にもない教授という立場で学生とどう接すればいいのか戸惑ったけれど、福祉とスポーツを学ぶ学生の中で、1人でも2人でも興味を持ってくれたらいいなと思って、ボランティア活動を通じて感じたことなどを話させてもらいました。今回は岩田くんを通じてつながって、関西大学とは縁がありますね。



赤星 憲広—あかし のりひろ

■元プロ野球選手(外野手)。野球解説者・野球評論家。1976年愛知県生まれ。愛知県立大学高校、亜細亜大学、JR東日本を経て、2000年ドラフト4位で阪神タイガース入団。新人王。同年から5年連続盗塁王。2009年ダイビングキャッチを試みた際に負った中心性脊髄損傷が原因で引退。1127試合出場。通算打率295、盗塁381個。ゴールデングラブ賞6度受賞。ベストナイン3度選出。2003年から2009年まで、盗塁数と同じ台数の車椅子を施設・病院に寄贈。引退後は「Ring of Red ~赤星憲広の輪を広げる~」として継続。著書に『決断』(集英社)、『一瞬の判断力』(宝島社)などがある。中学生野球チームREDSTAR Baseball Clubのオーナーも務める。



■対談

社会貢献を考えている人に対して、背中を押す存在にならなければと思っています。タイガースに入団してから、たくさんの方々が応援してくれました。これからは応援してもらった分、恩返ししていきたいですね。

（岩田）

いろいろな方からきっかけをもらって、僕は自分がやりたかった車椅子の寄贈活動を始めることができました。今度は僕がそのきっかけを与えられる立場になれたらと思って活動を続けています。（赤星）

◆小さくても踏み出す1歩の、きっかけになりたい

赤星 岩田くんもそうだと思うけど、いろいろな方からきっかけをもらって、僕は自分がやりたかった車椅子の寄贈活動を始めることができました。今度は僕がそのきっかけを与えられる立場になれたらと思って活動を続けています。

今年で8回目になる兵庫県小野市での「小野ハーフマラソン」も、そういった思いから続けてきたチャリティ大会。参加費の一部を福祉事業団体に寄付しており、ランナーはエントリーすることで社会貢献ができると理解して、参加してくれています。

僕は、皆が必ず社会貢献活動をやらなくてもいいと思っています。ただ、日本人は何かしたいと心では思っているけど、ちょっと照れくさいとか、一歩踏み出す勇気がなかなか出ない人が多い印象ですね。偏見の目で見える人もいます。

岩田 カッコつけてるとか言われることもありますね。

赤星 岩田くんもこれからも活動を続けていくと思うけど、社会貢献を考えている人に対して、背中を押す役割を担ってもらいたいね。

岩田 そういう存在にならないといけないと僕も思っています。タイガースに入団してから、たくさんの方々が応援してくれました。これからは応援してもらった分、恩返ししていきたいですね。——関西大学の在学、卒業生も、お二人の活動に関心を持っている人は多いと思います。

岩田 関大関係者の方たちと一緒に何か形に残るようなことをしたいですね。僕が活動実績をしっかり残せば、それを見た学生たちが意見やアイデアをどんどん出してくれて、きっと何か面白いことができそうです。

赤星 関西大学は総合大学なので、学生たちが目指す分野もすごく幅広い。だから、皆が一つになってやるのは難しいのかもしれませんが、それぞれが目指す分野の中に、一人一人ができる社会貢献が存在しているはず。その中には僕や岩田くんの活動につながることもあるかもしれない。もちろん学業や就職を一番に考えつつ、プラスして社会貢献に対しても目を向けてくれたらいいですね。4年間の学生生活の間に何か一つでも見つけてくれたら、関西大学には3万人余りの学生がいるから、それが一つのうねりを生み出して、一気に世の中を変えていきそうじゃないですか。

そういう大学になってほしいと思います。

岩田 無茶苦茶良いこと言いますね(笑)

◆大事ななのは「強い気持ち」。欠かせないのは「準備」

——お二人は野球でも社会貢献活動でも、行動をしっかり成果に結び付けてこられました。何かを成し遂げるために必要なことは何だとお考えですか。

岩田 僕の場合は、やはり気持ちが大事だと思っています。ぶれない心。「これだけは絶対やる」という強い気持ちです。学生の皆さんには、4年間でしっかり目標を見つけて行動に移してほしいですね。

赤星 僕は決定的に準備です。プロ野球の世界でも準備で差が生まれている。僕は体が小さいので、普通にしていたら絶対に勝てない。試合に臨むにあたっていかに準備をするか、そこで差を付けないと勝つことはできないと考えていました。

準備をすることで、行動したときに成果が早く現れる。準備がおろそかになると、成果が出るまで長くなる。準備は確固たる自信につながります。引退後はテレビに出演する仕事もさせてい

ただいていますが、実はめちゃくちゃ準備しています。これは社会に出て、どんな分野でも通じることではないでしょうか。

岩田 引退して自由にできることも増えたので、これからはいろいろなことにチャレンジしていきたい。そんな姿を応援してくださる皆さんに見せていきたいと思っています。

岩田 たしかに体のケアは、専属トレーナーと契約して、毎日コンディションを整えていました。おかげでけがは少なく済んだのだと思います。

赤星 何事でもしっかり準備をしてきた人は、どの分野においても準備が大切だと分かっているのだから、岩田くんはこれからのセカンドキャリアの中でも、確かな足取りで前進していける人物だと思いますね。

岩田 引退して自由にできることも増えたので、これからはいろいろなことにチャレンジしていきたい。そんな姿を応援してくださる皆さんに見せていきたいと思っています。

——お二人の今後のご活躍に期待がふくらみます。ありがとうございました。

LEADERS NOW!



©松尾／アフロスポーツ

Athletics

東京パラリンピック陸上競技の男子1500m(視覚障害T11)で銀メダル、5000m(視覚障害T11)で銅メダルを獲得した和田伸也さん。関西大学在学中に視力を失い、その孤立した世界から救ってくれたのがランニングだった。趣味からスタートし、一つずつ目標を達成して最高の結果を手にした。「次は世界一」。さらなる高みを目標に、また前へと進む。



中学、高校ではラグビー部に所属していた。高校2年生のころ、視力が落ち、視野が狭くなってきた。網膜色素変性症だった。「ボールやプレーヤーが追えなくなり、退部せざるを得なくなりました」。

大学3年次に進級するころには、どんなに拡大した活字でも見えなくなり、病気が進行することを想定して、2年次の1年間で点字の読み書きを習得し、点字使用に切り替えた。「社会学部事務室の方たちには、一番困っていた時期に助けてもらい感謝しています。教科書を拡大した資料を用意してくれて、点字の使用に切り替えた後は点訳を発注してくれました。おかげで卒業することができ、今につながっています」。

学部生時代は自分の視力への対応で時間を取られたため、さらに勉強を続けようと大学院に進み、修了後の2004年、大阪府視覚障害者福祉協会の点字図書館で働き始めた。

一步一步前進し、最高の結果に

人生で、今が一番楽しい

- 東京2020パラリンピック
男子1500m(視覚障害T11)銀メダリスト
男子5000m(視覚障害T11)銅メダリスト
和田伸也さん
—大学院社会学研究科博士課程前期課程 2002年修了—

和田伸也—わだ しんや
■1977年、大阪府生まれ。大学在学中、網膜色素変性症のため視力を失う。2000年社会学部卒業、2002年大学院社会学研究科博士課程前期課程修了。長瀬産業所属。ロンドン2012パラリンピック5000mで銅メダル、リオ2016パラリンピック1500m、5000m、マラソンの3種目で入賞。東京2020パラリンピック1500mで銀メダル、5000mで銅メダルを獲得。



大きな財産となったオリンピックの大舞台

次世代につなぐ新鮮な景色

- 東京2020オリンピック
空手女子形 銀メダリスト
清水希容さん
—文学部 2016年卒業—

清水希容—しみず きよう
■1993年、大阪府生まれ。2016年文学部卒業。ミキハウス所属。東京2020オリンピック空手女子形で銀メダルを獲得。オリンピックの追加競技に空手が提案された際には、大会組織委員会のヒアリングで演武を披露した経験も。全日本選手権7連覇、世界選手権2連覇など、数々の大会で優れた成績を収めている。



©西村尚己／アフロスポーツ

Karate

東京2020オリンピック、観客のいない静まり返った会場に気合の声が響き渡った。「世界のいろいろな舞台に立ってきたけど、今までの大会で経験したことがないぐらい集中力が高まりました。緊張よりもあの舞台に立つという覚悟の方が強かったからか、『表情が全然違った』と言われました」。今大会で初めて競技種目となった空手形で銀メダルを獲得した清水さんは、大舞台の感想をこう語る。

小学校3年生から始めた空手。大学入学後も授業の合間をぬって空手漬けで過ごした。文学部から近い道場と教室を行ったり来たりした4年間。空手に生かせるからと、人間健康学部の授業も積極的に履修した。「授業内容が興味深かったし、先生には体の使い方などを相談しました。教えていただいたことを試合で実践するのも楽しかったです」。

卒業後はミキハウスに所属。全日本選手権大会7連覇、世界選手権大会2連覇など華々しい戦績を残し「空手は自分の人生そのもの」と語る清水さんが、オリンピックへの思いはひとしおだった。「今までの空手界は、オリンピック出場を目標にすることもできなかった。今回追加競技に採用していただいてこの舞台に立てたことは、本当に奇跡です。私自身の大きな財産になりました」。

コロナ禍で開催が1年延期になったことでメンタルの調整が大変だったと振り返る。「延期が決定した時は、試合数が多くて稽古もままならないまま大会に出場する状態がストレスだった時期。心身共ボロボロだったので、『延期されたことで落ち着いてオリンピックに向けての調整ができる』と喜んでいました。けれど半年も過ぎると、試合自体が全部なくなったことで自分の状態がどの程度に分からなくなるといった別のストレスで精神的に参ってしまっただけ。そんな時、過去にオリンピックへ出場した知人がメンタルコーチを目指していると知り、オンラインで相談してみることに。「オリンピックへの心構えに加えて『自然に体が動くくらい

稽古すればいい』と言われた言葉が大きかった。それぐらい練習すれば、気持ちはどうこうじゃないと思えました」。

オリンピック後、多くの人から声を掛けられる場面が増え、空手を知ってもらえたことを実感した。「『こういう速い動きだね』『気合の声がすごいよね』と(笑)。『やってみたい』という問い合わせも増えたようです。今回のオリンピックで空手の魅力を少しでも発信できたのなら、うれしいですね。自分を輝かせてくれた空手に恩返しの意味も込めて次世代の子供たちには自分の経験をしっかり伝えたい、オリンピックに出場した8人しか見ていない景色を伝えていきたいと話す。

最後に関大生へのメッセージをいただいた。「私は空手でしたが、関西大学にはいろんな研究室があって専門的な勉強ができたり、大学でしかできないクラブ・サークルもある。大学は社会へ出る前に自分が進むべき道を探せる場所だと思います。いろいろなことに挑戦することによって、自分はどういうことに興味があったのか、自分にはこういうものが合ってたんだ、と気付けると思う。自分はこれだけしかダメだ、と可能性を狭めずにどんどんチャレンジしてほしいと思います」。



LEADERS NOW!



日本初の銀メダルを獲得した女子日本代表チーム
(後列右から2人目が松野さん) ©FIBA

Basketball

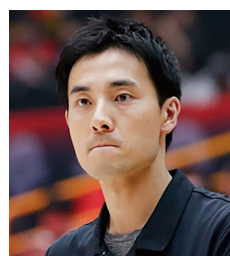
「感動しながら毎試合を戦っていました」と語る松野さん。ただ、印象に残っているシーンは、コート上での華やかな姿ではなく、舞台裏で見た選手の行動の変化だという。「午前中に試合を終え、合宿先に戻った矢先、誰に指示されるでもなく選手たちが黙々とトレーニングを始める姿は、見ていて誇らしい気持ちになりました」。緒戦から決勝まで約2週間という長丁場では、フィジカルを落とさないためにトレーニングの継続が不可欠。1～2日間隔で試合が組まれるオリンピックにおいて、トレーニングをするベストなタイミングは「試合後」となる。接戦続きの中でも自主的にトレーニングに励む姿は、松野さんが言う「自分で自分の体を管理する」の理想像。「銀メダルは言うまでもありませんが、選手の行動変容こそが、今後受け継いでいくべき『レガシー』だと思っています」。

選手の意識改革に着手したのは2017年の就任当初から。まず自分の体に関心をもってもらうことから始まった。国内リーグと代表活動を兼任する選手たちは、まとまったオフを取ることができず、故障を抱える者も多い。「痛む患部はあくまで被害者。そこに負担を集中させる原因は他の部分の機能不全です」。適切に体を動かせば、これだけ動きやすくなるんだと実感してもらうよう指導し、次第に練習前後に自主的に補強に励む選手が増えてきた。オ

主体性を重んじた「自己管理」の文化を、東京2020のレガシーに

トレーニング指導を通して選手たちとともに戦う

●東京2020オリンピック・バスケットボール
女子日本代表 スポーツパフォーマンスコーチ
松野 慶之さん —文学部 2009年卒業—



リンピック直前では、それまで練習後に全体で行っていたクールダウンすら選択制に変更。自分に必要なものを自分で選んで実践する形に切り替え、更なる行動変容を促した。「勇気が要りました。ある意味、職務放棄ですから」。松野さんが勇気をもって選手に主導権を渡せたのは、数年かけて水面下で積み上げられた選手の意識改革があったからこそだ。

3年後のパリ大会に向けて松野さんが目指すのは、選手の自主性を重んじるコンディショニングの形を、モデルケースにすること。その先にはスポーツの価値の再定義がある。

「『コーチに怒られないように』、『スタッフに言われたから』ではなく、自ら考え主体的に取り組むこと。自ら進んで行動を起こせる教育の機会となれば、スポーツの価値はもっと高まるはず。そんな風土をフィジカルの面から示していけたらと」。松野さんの舞台裏での挑戦は続く。

松野 慶之—まつの よしゆき

■1986年、東京都生まれ。2009年文学部卒業。大学卒業後、R-body projectにて一般の方からアスリートまで幅広くトレーニングをサポート。2017年に日本バスケットボール協会専任スポーツパフォーマンスコーチに就任し、東京2020オリンピック銀メダルに輝いた女子バスケットボール日本代表のフィジカル強化を担当した。

より多くの人に“声を持つ力”の可能性を伝えたい

ブラインドサッカー®を“声”でサポート

●東京2020パラリンピック・5人制ブラインドサッカー
日本代表チーム ボイストレーナー
新生 剛士さん —社会学部 1991年卒業—

視覚障がいのある選手がプレーするブラインドサッカー(5人制サッカー)チームが、東京2020パラリンピックで5位に入賞。そのチームで、縁の下で力持ちとして“声”のトレーニングを担当したのが、プロコーチ・ボイストレーニングコーチの新生さんだ。

声を持つ力に気付いたのは、リクルートで営業に携わっていた時。シンガーソングライターの楠瀬誠志郎さんが主宰する、発声メソッドを利用したボイストレーニングスクールの広告を担当したのがきっかけだった。社会人でもアメリカンフットボールを続けていた新生さんは、打ち合せて「発声には“背骨・肩甲骨・股関節”が重要」と聞き衝撃を受けた。「背骨・肩甲骨・股関節の調整は、アメフトでQB(クォーターバック)が強いボールを投げるためのトレーニングと同じ。発声のメソッドは、アスリートの身体調整に応用できる!」と思って声を鍛え始めました」。

退社後はプロコーチとして独立し、QBのスキル指導を行う「QB道場」と共に声の悩みを解決する「声トレ塾」を設立。ストレッチやマッサージで体の柔軟性を高め、声の出し方や響かせ方を変える指導をしてきた。これらの仕事の経験から、ブラインドサッカーチームのサポートコーチに抜擢されたのだ。

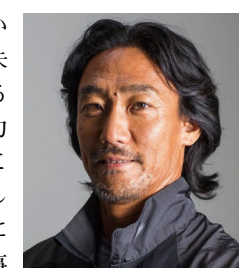
プレーヤーには視覚障がいがあるため、試合を進めるには音が

©日本ブラインドサッカー協会／髙野春雄



Football 5-a-side

頼りになる。「プレーヤーたちがお互いに声を出し合うことで、ファウルを未然に防いだり守備力を強化したりすることもできるんです。監督から『声の力で守備は変えられる』と聞いた時に、これはやりがいのある仕事だと思いました」。戦力として声を使う。新生さんにも新しい挑戦で大きな意義のある仕事になった。



今後は世の中の人に声を出すことの気持ち良さ、大切さをもっと知ってほしいと話す。「例えば声が大きくて堂々としていると、仕事ができるように見えますよね。“声を鍛える”ことはイメージアップにも効果的ですので、今後はさまざまなシーンで相手に伝わりやすい発声のお手伝いをしていきたいと思っています」。

新生 剛士—しんじょう たけし

■1968年、大阪府生まれ。1991年社会学部卒業。大学時代は体育会アメリカンフットボール部に所属しQBをつとめる。卒業後はリクルートに就職。仕事を通じて発声メソッドを利用したボイストレーニングに出会い、退社後「QB道場」、「声トレ塾」を設立。2019年よりブラインドサッカー・サポートコーチに就任。東京2020パラリンピック5位入賞の一翼を担った。

さらに世界で活躍するセーラーを目指して

関大と共に戦ったオリンピック

●東京2020オリンピック・セーリング 49erFX級



高野 芹奈さん
—人間健康学部 4年次生—

高野 芹奈—たかの せな

■1998年、大阪府生まれ。関西大学第一高等学校卒業。人間健康学部4年次生。体育会ヨット部所属。2015年420級世界選手権大会ジュニア部門1位(女子総合3位)、2016年リオオリンピックにセーリングでは史上最年少で出場。2019年世界選手権大会では日本勢トップとなり、2度目のオリンピック出場を果たした。

▼ヨットのバランスをとるクルーを務める高野さん(手前)©ロイター／アフロ



Sailing

波しぶきを切り裂き、海上を疾走する。東京2020オリンピックセーリング女子49erFX級で2度目のオリンピック出場を果たした高野さん。「悔しい結果(18位)となって残念ですが、とても光栄です。この年齢で2度もオリンピックに出場できたことは貴重な体験でした」と振り返る。

コロナ禍での開催となった東京オリンピックは試練の連続だった。「行動が制限され、とてもストレスが溜まりました。1年の延期もモチベーション維持など想像以上で大変でした」。

まさにヨットの「申し子」だ。中学3年生で初めてヨットに乗ると、関大一高でインターハイ優勝。「海のF1」とも呼ばれ、高速レースが魅力の49erFX級で頭角を現すと、競技開始からわずか3年半でリオ大会への切符をつかんだ。



ただ、急成長とともに高額な遠征費など出費もかさむ。リオ大会前には大学での募金活動や後援会からの支援を得て、資金難を乗り越えた。「ここまで不自由なく活動できたことを本当に幸運に感じています。コロナ禍でも多くの人がサポートしてくださり、活動を続けられたことが本当にうれしい」と感謝する。

現在、人間健康学部4年次生。世界の海が活動拠点だけに、なかなか大学生活を楽しむ余裕はないが、「今は卒業論文を作成しながら、オンラインで授業を受けています」。今後は次回のパリ大会へ照準を合わせつつ、世界最高峰のヨットレース「SailGP」にも挑戦。「将来的には女性セーラーとして、もっと世界で活躍できる選手になりたいと思っています」。

最後に支えてくれた関大生たちへ、メッセージをもらった。「関大生の一人として、日本で開催された特別なオリンピックに出場できたことは私の誇りです。これからも私は挑戦し続けます。皆さんも絶対に諦めずに挑戦し続けてください。関大パワーで頑張りましょう!」。

◀ マルクスの顔がプリントされた愛用のカップ
Asst. Prof. Momoki's favorite mug featuring Marx

ハンナ・アーレントの政治思想 ・Political Thought of Hannah Arendt



アーレントの思想をもとに 現代日本の労働、全体主義を考える

デジタル時代の公共性を目指して

Thinking Labor and Totalitarianism in Current Japan through Arendt

Toward Publicness in the Digital Age

◎法学部 百木 漠 准教授

• Faculty of Law

— Associate Professor *Baku Momoki*

百木准教授の著書▶



ハンナ・アーレント Hannah Arendt

政治思想史は古代から現代まで政治を巡って人々がどのような思想を繰り広げてきたか探究する学問。百木漠准教授はハンナ・アーレント(1906～1975)の思想の研究に取り組んでいる。

■アーレントの思想、労働とマルクスの視点から探究

— 専門分野について教えてください。

アーレントの労働思想を中心に研究をしてきました。アーレントは痛烈にマルクスを批判しながら、近代が労働中心主義の社会になっていることに警鐘を鳴らし、それが全体主義への道に繋がりがねないと論じました。アーレントの思想を労働やマルクスの観点から論じた研究はこれまで少なかったもので、そこで新たな知見を開くことを目指してきました。

— アーレントの思想の特色、面白さはどういったところにあると感じていますか。

アーレントはドイツ生まれのユダヤ人で、26歳の時にナチス政権が誕生し、アメリカへ亡命せざるを得なくなりました。彼女は自身の体験も踏まえながら、全体主義の問題と生涯対峙してきました。アーレントの全体主義論は今もなお多くの鋭い視点を提供してくれます。

なかでも私は労働と全体主義の関係に着目してきました。人間の生がすべて労働にとらわれてしまった社会でこそ、全体主義支配が出現しやすくなる。アーレントはマルクスを独自の視点で読み解きながら、そのような分析を磨き上げていきました。アーレントのマルクス論は誤読に満ちているとこれまで批判されてきましたが、私はその誤読の中にこそ、アーレントの全体主義の核心を読み解く鍵があると見ています。

■「労働」の肥大化と「活動」の衰退

— 労働についてアーレントはどう考えたのですか。

アーレントは人間の営みを労働・仕事・活動の三つに分けています。「労働」は生命を維持するための営み。「仕事」は耐久性のある物を製作し、それを通じて人間世界を創造する営み。「活動」は他者との共同行為、特に言葉を用いたコミュニケーションです。近代以前には、この三つのうち「活動」こそが人間にとって重要な営みであり、「労働」には重きが置かれていませんでした。しかし近代に入ると、むしろ「労働」こそが社会的に重要な営みとなり、「活動」の地位は低下します。現代社会でも、われわれはどのような職業に就くか、どんな会社に勤めるのか、どれだけ収入があるのか、といった事柄にばかり関心を持っている。反対に「活動」は公共的な対話という意義を失って、単なる私的なおしゃべりになっていく。アーレントはこうした「活動」と「労働」の逆転現象を批判的に捉えていました。彼女にとって、「活動」は複数性や公共性に対応し、「労働」は単一性や私的なものに対応します。ゆえに「活動」の衰退は複数性や公共性の衰退に繋がり、最終的には全体主義の出現と結びつく。全体主義に対抗するためにも、人々が公共的な問題について話し合い、複数の意見を交換する公共空間を創り出すことが重要だとアーレントは考えたのです。

The history of political thought is a study that explores the ideas people have developed on politics from ancient to modern times. Baku Momoki, Associate Professor, focuses his research on the thought of Hannah Arendt (1906-1975).

■ Exploring Arendt's thought from the perspectives of labor and Marx

— What is your specialized field of research?

I have been primarily studying Arendt's thought on labor. In her fierce attacks on Marx, Arendt warned of modern times becoming a labor-centric society, arguing that it could lead to totalitarianism. As there have been few studies on Arendt's thought discussed from the perspective of labor or Marx, I have sought to open up new insights.

— What do you find interesting and distinctive about Arendt's thought?

Arendt was a German-born Jew who was forced to flee to the United States, after the Nazi regime came into power at her age of 26. She confronted the problem of totalitarianism throughout her life, partly based on her own experiences. Arendt's theory of totalitarianism still offers many insightful perspectives.

In particular, I have focused on the relationship between labor and totalitarianism. It is in a society where all human life is taken over by labor that a totalitarian rule is quite likely to emerge. Arendt refined such analyses by reading Marx from her own unique point of view. Arendt's theory of Marx has been criticized for being full of misreading, but I see in that misreading the key to the core of Arendt's theory on totalitarianism.

■ Swelling labor and declining action

— What did Arendt think about labor?

Arendt divides human activities into three categories: labor, work, and action. Labor is a life-sustaining activity. Work is the process of creating the human world through making durable objects. Action is collaborative activity with others, especially verbal communication.

Before modern times, of these three categories, it was action that was deemed important for human beings, and labor was not so emphasized. In modern times, however, labor has become a socially important activity, and the status of action has declined. As you can see in today's society, we are mainly interested in what kind of work we do, what kind of company we work for, and how much we earn. On the other hand, action loses its significance as public dialogue and becomes merely the subject of private chatting. Arendt was critical of this reversal between action and labor. For her, action corresponds to plurality and the public realm, and labor corresponds to singular experiences and the private realm. Therefore, the decline of action leads to the decline of plurality and the public realm, and ultimately to the emergence of totalitarianism. To counter totalitarianism, Arendt thought it was important to create a public space where people could discuss public issues and exchange plurality opinions.

■ Importance of gathering and discussing

— That seems to apply to Japan now.

After graduating from university, I worked for an automobile-related manufacturer for three years. It was the time when non-regular employment and so-called "black companies" started to become problems, and I was working overtime quite extensively. People in Japan are still too busy working to afford to participate in public activities. As the proportion of labor in daily life increases, action tapers off. There are few opportunities for political participation, and people are reluctant to talk about politics at school or work. There are almost no spaces for plurality discussions. This is exactly a case in point of Arendt's analysis.

■研究最前線

■「集まって話す」ことの大切さ

——今の日本にも当てはまりそうですね。

私は大学卒業後、自動車関連メーカーに3年間勤めました。ちょうど非正規雇用やブラック企業が問題になり始めた時期で、自分も長時間残業をしていました。日本はいまだに働くことに忙し過ぎて、公共的な活動に参加する余裕を持つのが難しい。生活に占める「労働」の比重が大きくなると「活動」がやせ細る。政治参加の機会は少なく、学校や職場で政治の話をするのはばかられ、複数の議論をする場もない。まさにアレントの分析に当てはまります。

——新型コロナウイルスの災禍が続く中、私たちはどう取り組んでいくべきなのでしょう。

「活動には公共的な空間が必要だ」とアレントは繰り返し述べています。同じ時間と空間を共有しながら、異なる意見を交換しあう。意見が異なる他者とも同じ世界で共生する道を探っていく。それこそが政治的な営みです。オンラインでのつながりは便利で効率的な一歩、すでに人間関係が出来上がった人や意見を同じくする人どうしで集まりがちになり、社会的な分断が進んでいく恐れがあります。自分とは異なる意見や属性の人と物理的に出会う機会や場を設けるのはやはり大事なことです。

政治思想史というとなんだか小難しく抽象的なイメージがあるかもしれませんが、私自身は政治思想の歴史と現代の政治問題を常にリンクさせながら考えていきたいと思っています。先人の叡智に学ぶことで、現代社会の見通しを少しでも良くできればと。コロナ後の政治や社会がどう変わっていくかにも関心を持っています。

——21世紀の全体主義、ファシズムをどう考えますか。

デジタル全体主義の問題に関心を持っています。今や私たちの行動はすべてスマホやパソコンにデジタルデータとして記録されています。そうしたビッグデータをAIやアルゴリズムを用いて統制管理する、新たな全体主義が生まれつつあるのではないかと。



こうしたデジタル全体主義に対抗するためにも、やはり「集まって話す」ことが大切だと考えています。多少面倒でも時間をかけて共通の空間に集まって、意見を交わし合う。それこそが複数性や公共性の実現につながる。議論したあとで飲みに行ったりすることも含めて(笑)。

——講義ではどのように心掛けていますか。

できるだけ分かりやすく政治思想の面白さを伝えつつ、最後は少し踏み込んで、深い学問の入り口まで学生たちを連れて行ってあげたいと思っています。過去の政治思想と現代の政治問題がちゃんと繋がってるんだよということを示したうえで、そこから先は学生たちに考えてほしい。どの思想が正しいと決めつけないようにしています。大学は正解が一つでない問題を考えるところですから。



アレントが人間の営みを3つに分けた「労働(labor)」・「仕事(work)」・「活動(action)」

labor/Arbeiten
work/Herstellen
action/Handeln



◀アレントの思想を「労働」と「マルクス」の視点から読み解いた著作
Momoki's book elucidating Arendt's thought from the perspectives of labor and Marx

—— How should we deal with the ongoing disaster caused by COVID-19?

Arendt reiterates that actions require public space. Share the same time and space, and exchange different opinions. And seek ways to coexist in the same world with others who have different opinions. That's what political activities are all about. While online connections are convenient and efficient, they tend to bring together people who have already formed relationships or who share similar opinions, which may lead to social fragmentation. I think it is still important to have physical opportunities and places to meet people with different opinions and attributes.

The history of political thought may seem to entangle rather difficult abstract theories, but I would always like to link the history of political thought with contemporary political issues. I wish to present a clearer vision of modern society by learning from the wisdom of our predecessors. I am also interested in how politics and society will change after the COVID-19 pandemic.

—— What do you think of totalitarianism and fascism in the 21st century?

I am concerned about the issue of digital totalitarianism. Nowadays, all of our activities are recorded digitally on our smartphones and computers. A new totalitarianism seems to be emerging that uses AI and algorithms to control and manage this kind of big data.

To combat this kind of digital totalitarianism, I think it is important to go out of our way to talk. Even if it may be a little troublesome, we should take time to gather in common spaces and exchange opinions. That is a way to realize plurality and the public realm, including, of course, going out for a drink after a discussion (laughs).

—— What are the things you keep in mind with your lectures?

I want to convey the interesting aspects of political thought as clearly as possible, and at the end, I would like to go a little further and take the students to the entrance to the world of academia. I can show students that past political ideas and contemporary political issues are well connected, and the rest will be up to the students who can think further. I try not to assume which ideas are right. University is a place where you can think about problems that cannot be solved with single correct answers.

■研究最前線

バイオメカニクスと自動車安全の研究 ・Research on Biomechanics and Automotive Safety

力学の視点から 効果的な被害軽減を探る

怪我のない安心安全な社会を目指して

Exploring Effective Damage Reduction from the Perspective of Mechanics

For a Safe and Secure Society Without Injury

◎社会安全学部 伊藤 大輔 准教授

● Faculty of Societal Safety Sciences — Associate Professor *Daisuke Ito*

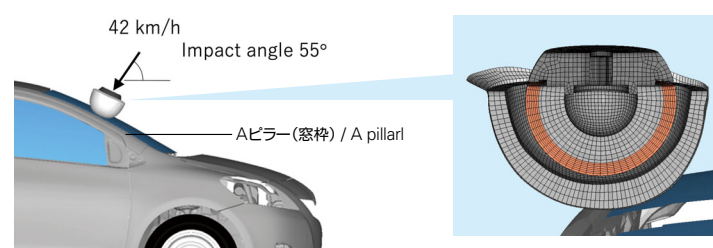
自動車事故で歩行者や自転車と衝突した時、どのようなメカニズムで傷害が起きるのか。また、自転車乗車時にヘルメットを着用することで、衝突時に頭部をどれだけ守ることができるのか。社会安全学部の伊藤大輔准教授は、力学的アプローチで、交通事故やスポーツ傷害などの身近な怪我まで探究。自動運転装置の普及など近未来も見据え、安心安全な社会づくりを目指している。

What kind of mechanism causes injuries when a car collides with pedestrians or cyclists in a car crash? Also, how much can the head be protected in a collision by wearing a helmet when riding a bicycle? Daisuke Ito, Associate Professor at the Faculty of Societal Safety Sciences, uses a mechanics-based approach to explore familiar injuries such as traffic accidents and sports injuries. With an eye on developments expected to occur in the near future, such as the spread of autonomous driving devices, he aims to create a safe and secure society.

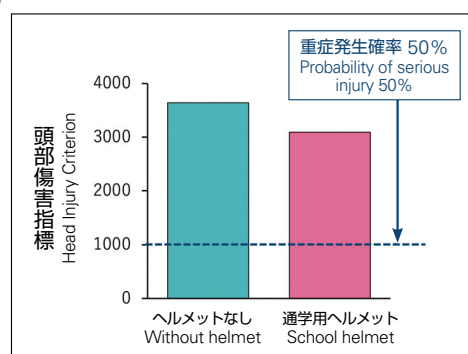
多方向衝撃保護システム (MIPS) を搭載したGIRO社の新型ヘルメット ▶
GIRO's new helmet with multi-directional impact protection system (MIPS)



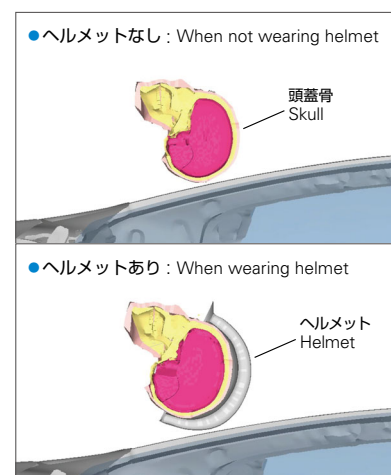
▼サイクリスト衝突でのヘルメットの効果：The effect of a helmet on cyclist collision



●自動車対自転車事故を想定した頭部衝撃試験。ヘルメットによる頭部傷害軽減を検証
Head impact test assuming a vehicle-bicycle collision
Verification of head injury reduction effect by wearing a helmet



●ヘルメットありでも頭部傷害指標は高いが、頭蓋骨骨折は防ぐことができる
Although the Head Injury Criterion is high even with a helmet, skull fractures can be prevented



■目の前の課題解決に役立つ機械工学

——専門分野について教えてください。

自動車衝突安全、衝撃生体力学です。機械工学を基に、怪我のない安心安全な社会を実現するためにはどうしたらいいか、怪我はどのように起こるのか研究しています。そもそも事故を未然に防ぐためにはどうすればいいか、事故が起こるメカニズムの研究にも取り組んでいます。

——研究の道に進んだきっかけは何だったのでしょうか。

もともと数学や物理が好きで、高校生の時、私は同じ理科系でも生命や星の誕生より、ロボットや飛行機など対象も幅広く、実際に役立つ機械に魅力を感じました。

大学では、バイオメカニクスの研究室があり、人の怪我を力学的に研究する「モノが壊れるのと骨折は現象・原理では同じ」と考える学問で、卒業研究に選びました。また、大学まで体育会でバレーボールを続け、怪我でプレーできないチームメイトを見てきたことで「怪我の予防や解決法を研究したい」とも思うようになりました。研究室では肉離れの研究をしていましたが、自動車衝突時の人の動きや怪我の発生を研究していた仲間を見ていたこともあり、修了後は一般財団法人日本自動車研究所で衝突安全の研究に携わっていました。2013年に大学へ戻り、自動車の衝突安全の一環としてヘルメットの研究を始めました。また、スポーツ傷害の研究も継続して取り組んでおり、力学的な観点で身近な怪我の原理を調べています。

■自転車ヘルメットの安全性は未開の研究分野

——ヘルメットを着用すれば安全なのでしょう。

自転車ヘルメットの話の前に、そもそも衝突事故における自転車乗員の安全性に関する研究はこれまであまり行われていませんでした。先行して研究開発が進められてきた歩行者保護対策のおかげで、車体のボンネットは人が衝突しても怪我しにくくできています。しかし、自転車との衝突では自転車乗員の持つ速度や向き、姿勢がさまざまであるため、事故実態は分かっていたものの、それを力学的に説明するという視点は十分ではありませんでした。そこで、事故時にヘルメットを着用していた場合、どのように衝撃が頭に伝わるか、その原理やメカニズムを検証した研究を実施し、その内容を論文として共著し、2016年に自動車技術会賞論文賞を受賞しました。

車体のAピラー (窓枠) にぶつかるとう重傷化する傾向があるので、車は時速40km、自転車は時速10kmの想定で、ヘルメットを着用した場合はどうなるのか実験したところ、窓枠に当たるとヘルメットの発泡体がつぶれてしまい「頭部傷害指標が高く、この想定速度では着用していても厳しい」という結果でした。しかし、事故を再現したコンピューターシミュレーションでは「着用していない場合に比べ、頭蓋骨骨折は防ぐことができる」という結論が出ました。

頭部の怪我には頭蓋骨の骨折と脳の損傷があり、衝突で頭が回転した影響で、脳震盪などが起きます。最近では、ヘルメット本体

■ Mechanical engineering to help solve the problems at hand

—— What is your area of expertise?

Vehicle crash safety and impact biomechanics. Based on mechanical engineering, I research how to realize a safe and secure society without injuries, as well as how injuries occur. I am also studying how to prevent accidents in the first place and the mechanism by which they occur.

—— What made you go into research?

I have always liked math and physics. When I was a high school student, I was fascinated by machines that are actually useful in a wide range of fields, such as robots and airplanes. This interested me more than other areas of science, such as the birth of life and stars.

At university, there was a biomechanics laboratory researching human injuries from the perspective of mechanics, based on the idea that the phenomena and principles behind broken objects are the same as those behind broken bones. I chose this field for my graduation research. I also continued to play volleyball in a sports club through university, and I wanted to research ways to prevent and remedy injuries after seeing my teammates being unable play due to injuries. While I researched muscle strains at the laboratory, I also saw fellow students researching the way humans kinematic behavior and sustain injuries during car crashes. This was one of the reasons that I became involved with the research of crash safety at the Japan Automobile Research Institute after I finished my studies. In 2013, I returned to university and began researching helmets as part of vehicle crash safety. I am also engaged in on-going research on sports injuries and investigating the principles of injury from a mechanical point of view.

■ Safety of bicycle helmets is an unexplored area of research

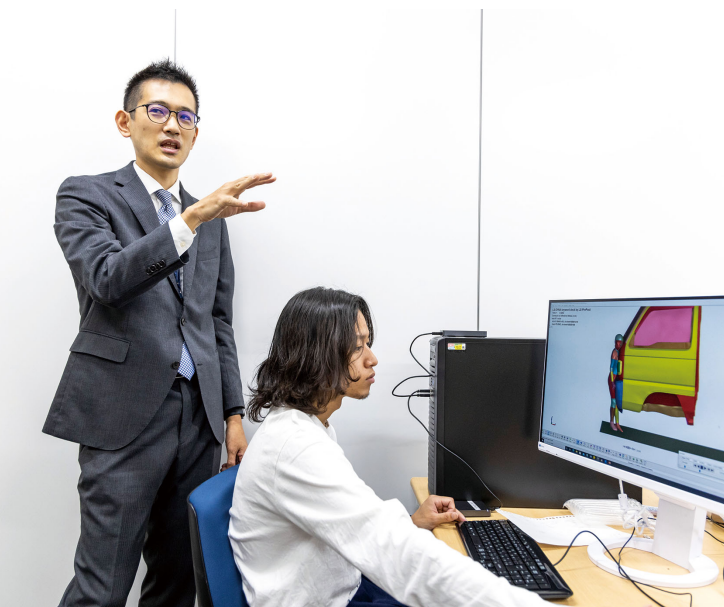
—— Are we safe when we wear a helmet?

Before talking about bicycle helmets, let me just say that there has not been much research on the safety of cyclists in collisions. Because of the pedestrian protection measures that have been researched and developed ahead of those for cyclists, vehicle hoods are now made to be less likely to cause an injury in a collision. However, the speed, direction, and posture of cyclists vary in collisions involving bicycles. So, even though we could understand the state of the accident, we lacked perspectives to explain it mechanically.

Therefore, I conducted research to verify the principle and mechanism of how the impact is transmitted to the head when a helmet is worn at the time of an accident. I co-authored a paper on the research and won The Outstanding Technical Paper Award from the Society of Automotive Engineers of Japan in 2016.

Since hitting the A-pillar (window frame) of a car tends to cause serious injuries, we conducted an experiment to see what would happen if a helmet was worn at a speed of 40 km/h for a car and 10 km/h for a bicycle. The experiment showed that the foam of the helmet was crushed in collision with the window frame, and that the Head Injury Criterion was high, making it difficult to protect against a collision at this assumed speed. However, a computer simulation





▲研究室で交通事故シミュレーションを行う学生
A student performing a simulation of a traffic accident in the laboratory



と頭の動きを分離する新型ヘルメットが海外で開発され、脳傷害の抑止効果がコンピューターシミュレーションで確かめられていますが、実際の事故でも効果があるのかを調べてみたいと思います。

■ヘルメットの安全基準の新設を提案したい

——事故防止と安全面の課題はたくさんありますね。

ヘルメットの安全基準の例として、JIS基準で一定の高さから落とす評価法があります。平面床への衝突を想定し、頭部に生じる加速度の低減効果を評価するものです。脳震盪の低減も考えるならば、頭部回転の低減効果も見た方が良く、新たな評価方法、基準の提案も今後の課題の一つです。

「衝突時の対策だけで受傷者は減らせない」は答えとしてあると思います。自動車対自転車の事故原因は、ドライバーの不注意と、自転車の飛び出しに二分できます。実際の事故映像やドライブレコーダーを分析して状況を再現し「衝突まで残り何秒なら回避でき



ドライビングシミュレータを用いた実事故状況再現
Reproduction of actual accident situation using a driving simulator

たか」「時速どれくらいだと回避できないか」などの解明を進めています。

■自動運転でも事故は起きる。過信禁物と実証したい

——自動運転や衝突被害軽減ブレーキにもつながる研究ですね。

最近では、飛び出しに対応する衝突被害軽減ブレーキ付きの車があります。しかし、過去の調査研究から、そのようなシステムが搭載されていても自転車の出合い頭の約7割は回避できるものの、残りは回避できないことが分かっています。自転車出現後1秒以内に衝突する場合も多く、まさに「車は急には止まらない」ので、自動運転技術があっても、ドライバーおよび自転車乗員が今の意識のままだと事故はなりません。

「自動運転が普及すれば事故ゼロ」と言われていますが、現実是这样ではありません。海外では、自動運転中の居眠りによる重大事故の報告があります。また、少し前の事例ですが、自動運転技術

の一部と言える標識認識機能で一時停止標識とラーメン店の看板を間違えることもあったなど過信禁物で、まだまだ課題は多いです。——最後に、学生の皆さんへのメッセージをお願いします。

やりたいことをまず見つけましょう。私は怪我を減らし安心安全な社会を実現したいと思って研究をやっています。ただ、やりたいと思って実施した研究でも「今のままでは事故低減、被害軽減は難しい」という厳しい結果になることもあります。そういった結果の中にも大抵何か新しい発見があり、その発見から可能性を探していけるかが大事だと思います。

大学は本来、研究成果をお互いに語り合える場所で、そういった話し合いから研究の核心へ到達することもあります。ゼミ・研究室で学生同士、学生と教員とが切磋琢磨して研究に打ち込むことはかけがえのない経験になるかと思います。単に単位を修得するために大学に通うのではなく、今しかない余白の時間を大切にしてほしいですね。

that reproduced the accident concluded that wearing a helmet helps to prevent skull fractures compared to when not worn.

Head injuries include skull fractures and brain damage, and head rotation in a collision can cause concussions and other problems. Recently, a new type of helmet that separates the body of the helmet from the movement of the head has been developed overseas, and its ability to help prevent brain injury has been confirmed by computer simulation. I would like to research whether this type of helme would actually work in a real collision.

■Proposing a new safety standard for helmets

——There are many challenges in accident prevention and safety, aren't there?

An example of a safety standard for bicycle helmets is the JIS standard, in which headform impactor wearing a helmet is dropped from a certain height. It evaluates how well the helmet reduces the acceleration of the head in the case of a collision with a flat floor. If we were also to consider the reduction of concussions, it would be better to evaluate reduction of head rotation. Proposing new evaluation methods and standards is also one of my future challenges.

I think one way to answer your question is that collision countermeasures alone cannot reduce casualties. The cause of an accident between a car and a bicycle can be separated into two main categories: carelessness on behalf of the driver, and the bicycle jumping out. By analyzing actual accident videos and drive recorders to reproduce the situation, I am trying to find out up until how many seconds the collision could have been avoided and at what speed it could have been avoided.

■Autonomous driving also causes accidents. Aiming to prove that we cannot be too trusting of the technology

——So, your research is also linked to automatic driving and collision damage reduction brakes.

Nowadays, there are cars with advanced emergency braking systems that respond to bicycles and other objects jumping out. However, past research has shown that even when such systems are installed, while about 70% of bicycle collisions can be avoided, the rest cannot. In many cases, the collision occurs within a second of the bike's appearance, and cars cannot stop suddenly, so even with autonomous driving technology, accidents will not be eliminated if drivers and bicyclists remain in their current state of mind.

It's been said that if autonomous driving becomes widespread, there will be no accidents, but that is not the case. Overseas, there have been reports of serious accidents caused by dozing off during autonomous driving. In another example from a while ago, the sign recognition function, which could be called part of autonomous driving technology, mistook a stop sign for a ramen restaurant's sign. Cases like this show that we should not be overly trusting of the abilities of autonomous driving, and that there are still many challenges.

——To wrap up, could you give a message for the students?

Find what you want to do first. I conduct research out of a desire to reduce injuries and realize a safe and secure society. However, sometimes when you do research you want to do, you sometimes find that you get unpromising results, such as that it is difficult to reduce accidents and damage the way things are now. That being said, there is usually something new to discover in those results, and I think it is important to be able to search for possibilities from those discoveries.

Universities should be places where we can discuss research results with each other, and these discussions sometimes lead to the core of research. I think that it will be an invaluable experience for students to work with other students and faculty members to devote themselves to their studies in seminars and laboratories. I want students not only to come to university to earn credits, but to cherish the extra time that you have only now.

Topics ■トピックス [学内情報]

◎創立135年、大阪と共に歩んだ歴史を回顧する

「大学昇格100年」に向けた記念事業を展開

1886年11月4日、大阪西区京町堀の願宗寺にて開校した「関西法律学校」から発展してきた関西大学。当時の日本には今日のような私立大学は存在せず、関西大学も専門学校令に基づく私立の専門学校であった。1918年、帝国大学以外に公立と私立の大学設立を認める大学令が公布されたことを機に、総理事・山岡順太郎のリーダーシップの下、大阪財界や各方面からの支援を得て、1922年6月5日、本学は大阪初の私立大学となった。

本学にとって1922年は、大学昇格、千里山キャンパスの開校、学是「学の実化」の提唱や「学歌」の制定など、今日の礎を築いたメモリアルイヤーとなっている。

そして、2022年6月5日、本学は「大学昇格100年」を迎える。これを祝い、同日に記念式典及びシンポジウムを千里山キャンパスにて開催するほか、大学昇格等の大事業を成し遂げた山岡順太郎の胸像やキャンパスの整備、学是「学の実化」を実践する起業家らによる公開講座「学の実化講座」の開催や経済人・起業家等の育成を目的とした「山岡塾」の創設など、多彩な事業を予定。

また、2022年10月には校友会、教育後援会と共に「関西大学フェスティバル in 関西」を千里山キャンパスで開催するなど、全関大を挙げて展開していく。



▲大学令により1922(大正11)年6月5日付で交付された大学設立認可状(写し)

千里山学舎初の建物、予科校舎▶

◎16年ぶり！ 体育会野球部からプロ野球選手誕生

野口智哉内野手がドラフト会議でオリックス2位指名 卒業生 森翔平投手も広島東洋カープ2位指名



▲(写真上)オリックス指名あいさつで、担当スカウトの谷口悦司さんと／(写真右)野口智哉内野手

体育会野球部の野口智哉内野手(人4)が2021年プロ野球ドラフト会議において、オリックスバファローズから2位指名を受けた。奈良県橿原市出身の野口選手は、右投げ左打ち。思い切りの良いスイングが持ち味で、1年次に大学日本代表候補に選出された。

リーグ戦の通算打率は3割超え。50m走は6秒0、遠投は120mと、強肩強打の3拍子揃った遊撃手として注目されている。

ドラフト指名を受け、野口選手は「オリックス・バファローズは小学生時代にジュニアチームに所属していた縁のあるチーム。しっかり活躍して、選んで良かったと思われる選手になりたい。まずは開幕1軍を目標に、基本の体作りから取り組んで、キャンプには100%の状態に入れるようにしたい」と、熱く意気込みを語った。

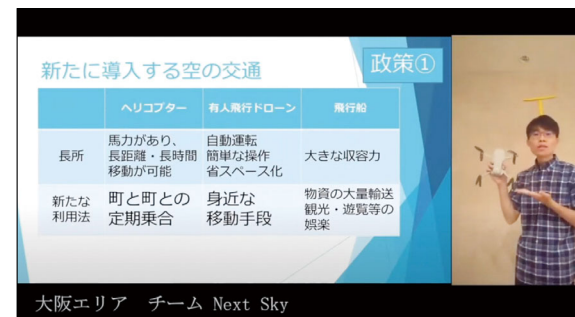
また、2020年3月に卒業した同野球部出身の森翔平投手(三菱重工West)も広島東洋カープより2位指名を受け、1年目からの2人の活躍に大きな期待が寄せられている。

広島東洋カープから指名を受けた卒業生の森翔平投手▶



◎未来の日本のビジョン・政策・予算を提案する

小高悠暉さんが「未来国会2021」の全国大会で優勝！



▲オンラインで開催された全国決勝大会で発表する小高さん(NPO法人ドットジェイビー YouTube公式チャンネルより)

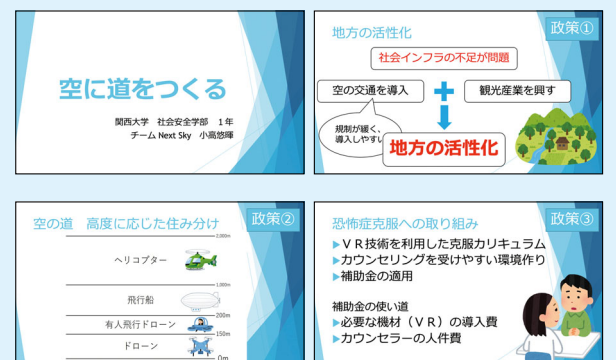
9月26日、「未来国会2021」の全国決勝大会が開催され、チームNext Skyとして出場した小高悠暉さん(社会安全学部1年次生)が、見事、優勝を果たした。

NPO法人ドットジェイビー主催、各省庁後援の「未来国会2021」は、「もしあなたが日本の総理大臣ならば」という設定で、30年後の日本の「ビジョン」、10年後の「政策」・「予算案」を提案する国内最大の政策コンテスト。本年度は全国から1,657人、530チームが出場した。

小高さんが掲げたテーマは、「空に道をつくる」。大学入学前、社会安全学部での防災・減災についての学びに役立つと考え、ドローンのさまざまな資格を取得した小高さんは、その時に空には規制があることを知った。一方で、ドローンの技術は目覚ましい進歩を遂げ、2025年の大阪・関西万博では会場の移動に使われるとの発表もあった。そこで、ドローンやヘリコプター、飛行船等を活用した空の交通を国民全員が利用できるようにすれば、30年後には更なる物流・人流を促し、新しい趣味・観光・娯楽を楽しめる社会を実現できるのではないかと考えたという。

大会で小高さんが立案した政策は3つ。まず1つ目は、「地方の活性化」。空の交通を全国導入する前に地方へ導入し、社会インフラの不足による過疎化の問題を解消すると同時に、地方ならではの自然を生かした観光産業を興す。2つ目は、「空の道をつくる」。高度に応じた飛行区域のすみ分けや飛行禁止エリアの設定を行い、安全対策を講じる。3つ目は、「人間の空社会への適応」。空の交通をすべての人が安心して利用できるよう、高所恐怖症や鳥恐怖症等に対してVR技術の導入やカウンセリング等の支援システムを打ち出す。そして、これらの実現にかかる予算を3,897億9,100万円と試算し、道路や線路などの建設費が不要であることからここまで抑えることができる上、新たな雇用を生み出し、経済を発展させることで税収をアップし、明るい未来に好転できるのではとアピールした。

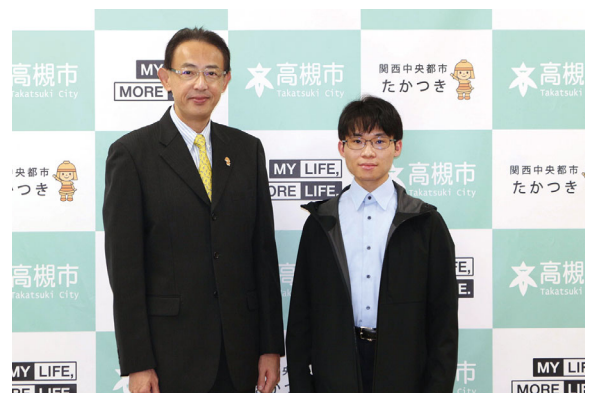
〈空に道をつくる〉チームNext Sky (スライド資料から抜粋)



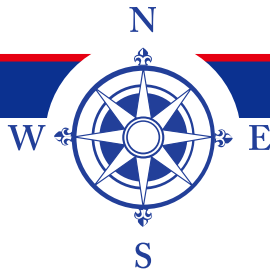
また、10月27日、小高さんは今回の優勝を報告するために、濱田剛史・高槻市長のもとへ表敬訪問。優勝した政策提案のプレゼンテーションを行い、その後の質疑応答では、空での衝突事故を限りなくゼロにする技術の話題を皮切りに、機体の規制や、電波妨害や鳥による墜落防止、自動運転導入による犯罪対策、想定できるさまざまな恐怖症について、具体的な政策が次々に展開され、話題が尽きなかった。



◀表敬訪問した高槻市役所で政策提案のプレゼンテーションを行う小高さん



▲濱田剛史・高槻市長(左)と小高さん



商学部の中嶋道靖ゼミが「関大スコープ」を開発中 環境に優しいスコープで、幼稚園児がお芋掘り



商学部の中嶋ゼミでは、環境に優しい素材を使用した「園児が喜ぶ砂場スコープ」の製作プロジェクトに取り組んでいる。これは、SDGsとDS(データサイエンス)の側面を持ち合わせた産学・幼大連携の取り組み。サンライト化成株式会社と協働し、摩耗の激しいプラスチック製スコープの先端部分に環境配慮素材を取り入れ、安全で使いやすい形状のスコープ製作を目指す。

11月2日には、その試作品を関西大学幼稚園にて開催された「お芋掘り」に活用。園児たちの手のひらの大きさを計測し聞き取り調査を通して、園児にとって使い勝手の良いスコープに仕上げるためのデータ収集を行った。このスコープは来春に完成予定。

また、同プロジェクトには、砂場遊びが苦手な園児に砂場遊びを好きになってもらいたいとの思いも込められており、好きになってもらうための要因分析も進めている。

大阪大学・大阪府立大学・大阪市立大学と協働し、 「留学生就職支援コンソーシアム SUCCESS」を創設



関西大学は大阪大学・大阪府立大学・大阪市立大学とともに発起人大学の一つとなり、2022年春、「留学生就職支援コンソーシアムSUCCESS」を始動する。

本コンソーシアムは、高度外国人材の育成および国内企業における定着促進を目的とし、多様な人材が活躍する次世代の日本社会の実現に寄与するもの。国内の高等教育機関で学ぶ外国人留学生の専門性とソフトスキルの育成を産学協働によって実現させ、持続した就業を前提とする「キャリア形成支援」に取り組む。従来の4大学ネットワークに加え、全国の高等教育機関に広く展開し、より多くの大学の参加を募っていく。

11月19日には、外国人留学生のためのキャリアフェスタ「SUCCESS-Osaka Future Design2021」が大阪梅田で開催され、日本企業と留学生がSDGsをテーマとし社会課題の解決に向けた事業を企画。本学からは15人の留学生が企画アイデアを発表した。

第69回全日本学生剣道優勝大会で 体育会剣道部男子が61年ぶりの3位入賞



▲写真提供:関大スポーツ編集局(撮影時のみマスクを外しています)

10月24日、第69回全日本学生剣道優勝大会がエディオンアリーナ大阪(大阪府立体育会館)にて開催され、体育会剣道部男子が3位に輝いた。

本学男子は、今回優勝した中央大学と準決勝で対戦。2-4で敗れたものの、1960年の第8回大会以来、61年ぶりの3位入賞となった。同大会での本学の最高成績は、1962年の第10回大会での準優勝。中央大学とは第8回大会の準決勝でも対戦しており、次大会での悲願達成に期待が高まる。

第44回関西大学統一学園祭をオンラインで開催

10月31日から11月3日まで、第44回関西大学統一学園祭がオンライン形式にて開催された。テーマは「CENTER～僕らが作る、新時代。～」。

どのような状況下であっても新しい何かを見出し、一人一人が変化の中心となることで、新しい感動を作り上げていくという決意が込められた。



期間中は、YouTubeやInstagramを通して、コメディライブや音楽フェス、ショートムービー、劇、ダンス、ファッションショーなどさまざまな企画が配信されたほか、文化会など各団体による写真や絵、模型などの創作作品が展示紹介された。

新型コロナワクチンの職域接種を実施(最終報告)

本学では、大阪医科薬科大学や地元自治体の協力の下、6月21日から1日最大900人規模の新型コロナワクチン大学拠点接種(職域接種)を実施した。対象は、本学学生・生徒・教職員とその家族に加え、他大学留学予定者、近隣大学学生・教職員、近隣住民等。千里山キャンパスの他、7月～8月には高槻ミューズキャンパスで、9月～10月には堺キャンパスでも実施した。接種者総数は26,594人に上り、全学生の57.1%となる16,918人の学生が接種を受けた。併せて千里山キャンパスで実施された、吹田市の職域接種でも、約4,000人が接種を受けた。